



里山クリーンハイク 奥多摩「城山」へ

特定非営利活動法人 日本マウンテンツアー・コンダクター協会

2020年6月21日(日) 朝9時、武蔵五日市駅前に9名のメンバーが集まった。NPO法人マウンテンツアー・コンダクター協会が行なう「里山クリーンハイク」だ。同団体は、通常の山登りのほか、山での貢献活動として、月1回のペースで東京近郊の山で清掃登山を行なっている。小学生以上であれば誰でも参加でき、環境問題について考えながら山歩きも満喫できる楽しいイベントとなっている。

杉の人工林



広葉樹の原生林



登山口で、同法人の理事長で、リーダーの増島達夫さんから、ゴミ拾いに使うトングとゴミ袋が渡される。今日の目的地は奥多摩にある434メートルの「城山」。梅雨入りしたばかりの週末、少し曇っているが暑くもなく気持ちいい山歩きになりそうだ。山頂までは1時間半程度の短い距離だが、地面のゴミを探しながらゆっくり歩く。登山の際は、どんな小さなゴミでも全て持ち帰るのが



ゴミ袋を配る増島達夫(左)さん

ルール。今はそういったマナーが浸透していることもあり、丹沢や奥多摩などの山で、ゴミが大量に落ちていることはめつたにない。ただ、地面をよく見ながら歩いてみると、昔捨てられたであろう古い空き缶やビンなどが見つかった。山に入るのは、登山客だけではなく、山で作業している人や麓に住んでいる人などでもいて、そこは生活の場でもあるのだ。

山に行くたびに思うのは、日本の森の豊かさ。日本の森は、例えばドイツの1.5倍ある。そしてその森が今でも豊かに残っている理由の一つに、

神社がたくさんあるからだという。日本人は森を神聖なものとすることで、それをいつまでも残してきたのだ。歩いていて、面白い風景に出会った。尾根道をはさんで、右側が植林された杉の人工林で、左側が広葉樹の原

生林(二次林)だった。明るさが全く違う。人工林のほうは、うす暗く、下草の植生も単一だが、一方の広葉樹林のほうは、いろんな木が自由気ままに育っていて、若葉の間から日光が差し込み、植生が豊かで動物や昆虫も集まってくる。

増島さんは、「気持ちいいと感じるのは人間も動物も一緒。明るく美味しそうな広葉樹林に動物たちが集まり、そこで糞をすれば土が肥えて、さらに豊かな森になっていきます」と言う。一方、このあたりの人工林は経済性の問題などで適切な間伐もなされていない所も多く、そのような森は死んでゆく。小さな山でも色々な顔があり、私たちと自然との関わりを考えさせられる話だ。

山頂に着いたら、思い思いに持参したランチを広げて山カフェ。少し曇っていたが麓の武蔵五日市の町並みの先には、遠く西武ドームの屋根まで見えた。今日みんなが集めたゴミは全部で6キ口。心地よい疲労感とともに駅に向かった。

【取材・事務局 藤原美樹】